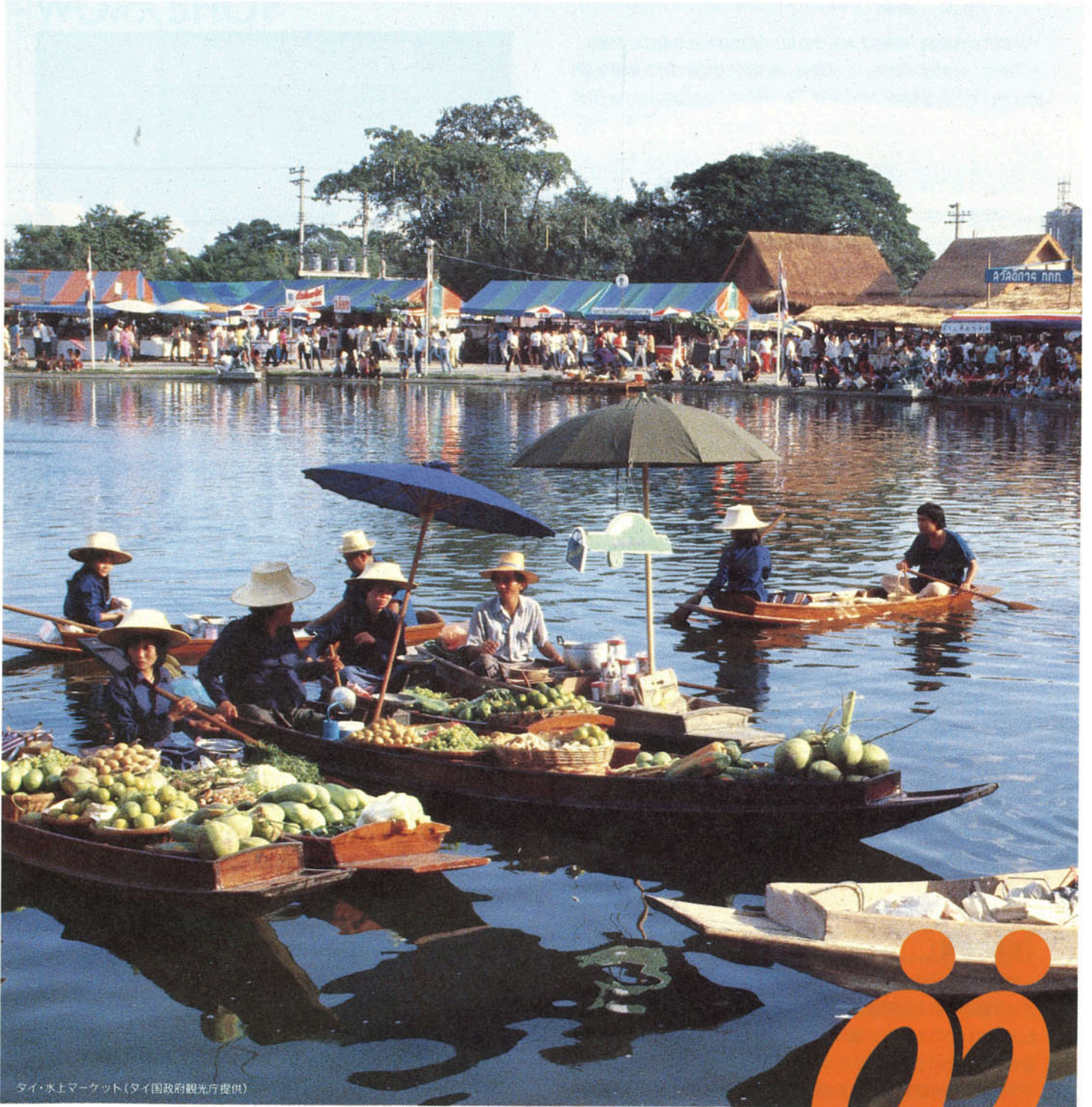


Asian Breeze



タイ・水上マーケット(タイ国政府観光庁提供)

第1回アジア女性会議—北九州

いま、女性たちは—WOMEN TODAY—

アジア各国“風”事情

海外訪問—タイ・インドネシア—

フォーラムの窓

あ
KFAW

JUNE 1991 No. **2**

1st KITAKYUSHU CONFERENCE ON ASIAN WOMEN 第1回アジア女性会議—北九州

アジア女性交流・研究フォーラムは、活動の大きな柱に「交流」と「研究」を掲げ、「交流」と「研究」を相互に関連づけた事業を展開していくことを目指しています。なぜなら、交流は研究に裏づけられることによって目的が明確になり、研究は交流とタイアップすることにより、深まりと広がりを持つことができるからです。

フォーラムでは、交流と研究を結びつける大きな行事として、「アジア女性会議—北九州」を毎年開催していく計画ですが、去る3月9日(土)～10日(日)に北九州国際会議場で第1回会議を開催し、約1000人が参加しました。

2日間にわたったこの会議では、1日目の公開シンポジウムで各国の女性問題への認識を深め、2日目の分科会と全体会で、さらに問題を掘り下げた討論を行いました。

●公開シンポジウム

■パネリスト

朱 逵 順(北京師範大学副教授)
マハムダ・イスラム(ダッカ大学助教授)
村松 安子(東京女子大学教授)
諸岡 和房(九州大学教授)
鄭 英 恵(広島修道大学講師)
■コーディネーター
上野千鶴子(京都精華大学助教授)

●分科会

■第1分科会(日本とアジアのかかわり)
上野千鶴子(京都精華大学助教授)
村松 安子(東京女子大学教授)
■第2分科会(中国)
朱 逵 順(北京師範大学副教授)
横田 耕一(九州大学教授)
■第3分科会(バングラデシュ)
マハムダ・イスラム(ダッカ大学助教授)
赤石 和則(東和大学国際教育研究所研究員)
■第4分科会(韓国)
鄭 英 恵(広島修道大学講師)
林 一信(九州国際大学教授)

●全体会

■コーディネーター
篠崎 正美(アジア女性交流・研究フォーラム主席研究員)

《会議の概要》

会議のテーマは「アジアと女性の今」。女性問題の解決を目指し、アジア諸国が抱える問題を明らかにするとともに、男女の枠をこえた人間としての生き方や国際交流のあり方についても活発な話し合いが展開されました。

アジアの女性問題を考える時に留意しなければならないのは、まず第1に、アジアは、都市化が進んだ国からそうでない国まで、非常に多様な国々が含まれます。しかし、女性のおかれている状況には共通点があるということです。労働を例にとってみると、女性は男性と同程度、場所によっては男性よりむしろ長時間労働をしているのですが、対価が支払われず、その労働の価値が低いと考えられる場合が多いことです。

第2に、ものの考え方に世代間の差が大きいということです。世



▲公開シンポジウム

代差は変化の著しい社会には特に顕著に表れます。同じ一つの国をとっても、どの世代を見るかによって意識や行動様式に大きな違いがあります。

第3に、アジア各国には、それぞれの宗教に裏づけられた男性優位の考え方があり、宗教の影響力が大きいという共通点が見られます。

このような状況の中で、最近の動きを見ると、韓国では、1990年、30年ぶりに家族法が改正され、家族制度の変容のきざしが伺えます。新家族法は、戸主承継制度の改正など人びとの意識の半歩先をいくもので、今後、韓国社会の意識を大きく変える可能性をつくりました。

バングラデシュでは、憲法で男女平等がうたわれているにもかかわらず、健康、教育、労働、雇用面とどれをとっても男女平等とは言えません。しかし、現在、政府が策定中の第4次5か年計画では、女性問題の改善が第1の目標とされており、施策の上では熱心な取り組みがなされています。

中国では、国が法制度上あらゆる面で男女平等を保障した結果、女性は国民経済のあらゆる部門に進出し、社会的地位を確立しています。しかし、近年、効率や合理性が重視されてくるに従い、育児や家事を行う女性が合理化の対象になり、女性の側にも、家にいて楽をしたいという志向が表れ、「女性は家へ」という逆行現象が起きています。ですから、近代化が女性にとって真に解放的かということ、必ずしもそうとは言えません。

このような現状をふまえて、日本とアジアとの過去、現在、未来におけるかわり方を点検していく中で、日本の経済援助について活発な意見が出されました。政府レベルの援助は大規模プロジェクトに向けられがちで、草の根レベルの人間にまで行きわたらないのが実情です。国を基準とするのではなく、草の根レベルでの連帯を築き、アジアの中のメンバーとして問題解決に取り組もう、男女を問わず人間への支援という眼目が必要であるという提言がなされました。また、単なる金銭的な援助でなく、経済的に困難な状況にある人びとが、自立していくための協力を行っているNGOの活動も紹介されました。





アジア女性交流・研究フォーラム理事長 高橋 久子

WORKSHOP

会議の新しい試みはワークショップです。公募により、女性問題について継続的に学習を進めている市内外の団体に情報交換や意見発表の場を提供しました。ワークショップは、市民の自主運営による討論と交流の場として、参加者からも高い評価を得ました。

〈ワークショップ参加団体〉

■OASC〈わたしたちのアジアセミナー〉

「わたしたちに出来るアジアの女性問題」のテーマで討論集会。アジアでの体験談も交えて、自由に懇談が進められました。また、会員による琴の演奏も行われました。

■高齢化社会をよくする北九州女性の会

自らの老いをより豊かなものにするために、さまざまなでだてを私たち自身の手で……。会の活動報告も含め、現代の日本社会における問題を提起しました。

■GMC〈グローバルメイックラブ〉

スリランカ、ブータンの生活資料を展示、両国の女性たちの生活の様子を紹介しました。台所用品の展示、日常の食事の紹介もされ、和やかな交流が行われました。

■BPW北九州クラブ

〈日本有職婦人クラブ全国連合会北九州クラブ〉

インドネシア、フィリピン、バングラデシュ、メキシコの母たちが自立にいたる姿を描く映画「母たち」を上映し、同じ母としての視点を持ちながら異文化とふれあうことの大切さが話し合われました。

■無窮花会〈ムクンファの会〉

韓国の教育事情、子供、女性の状況、日韓関係について、市民の視点で掘り下げた話し合いが行われました。

■ぐるーぷ：NOI セクシュアル・ハラスメント

「セクハラ」は流行語になったのですが、皆に理解されたのでしょうか。セクシュアル・ハラスメントの本質を探るため、ビデオによる学習会や討論会が行われました。

■シャプラニール＝市民による海外協力の会

「文字を学び明日に生きる村の女たち」(TBS)のビデオを上映。バングラデシュの女性の自立についてフリートーキングを行いました。また、バングラデシュの女性たちが製作した手工芸品の展示もされました。



▲ワークショップ

さまざまな出会いがある。ふとしたきっかけの出会いもあれば、長年の願いが叶っての出会いもある。甘い出会い、しょっぱい出会い、ほろ苦い出会い……「出会い」、それは豊かな可能性を秘めた未知への扉といってよい。人は出会いを求めてひろばに集まり、旅に出る。

アジア女性交流・研究フォーラムは、昨年10月発足以来、アジアフェスティバル、アジア女性問題懇談会、アジア女性会議と多彩な行事を展開してきた。

アジアと一口に言っても、その多様さ、複雑さは目を見張るばかりである。女性の地位にかかわりの深い宗教ひとつとっても、仏教、イスラム教、ヒンズー教、キリスト教、儒教、神道とさまざま。もちろん、気候、風土といった自然も違えば、産業や政治体制も異なる。以前から、一通りの知識としては身につけていたつもりであったが、実際にこの仕事にたずさわってみて、ますますその感を深くしている。

自らと異なるものを、ありのままに受けとめ、互に尊重して人間としての信頼関係を築くには……相手を知ること、自分を知ってもらうこと、月並みなようだがこれが何よりも重要だと思う。知らないがために生ずる些細な誤解やいら立ちが大きなトラブルを招くことにもなりかねない。フォーラムが提供する多くの出会いの場が、お互いの理解を深め、あたたかな交流をはぐくむきっかけになればと願う。

第1回アジア女性会議は、その意味で卒直な話し合いの場であった。国が男女平等を強調し、女性があらゆる分野に進出してきたが、一部の企業に女性の雇用拒否がみられ、女性自身、専業主婦にあこがれるなど問題が出はじめていると語った中国の朱さん、すべての階級に男女差別があるが、最近ようやく光明がみえはじめており、これをおし進めるためには国際レベルでの女性運動が必要と指摘したバングラデシュのイスラムさん。韓国の鄭さんは、最近、改正された家族で、やっと女性にも人間としての権利が認められたと熱っぽく語った。

七つの団体が自主企画で参加したワークショップも、和やかななかにも熱のこもった意見交換の場となり、ここでも多くの出会いがあった。はじめて会った人同士が旧知のように打ちとけ、語り合った、見知らぬ国の人びとのくらしを聞いて感動し、明日からの自分の生き方を変えようとする決意した人がいた、自分の気持ちが相手に理解されたことをよるに目にも涙した人もいた……。

このような語らいの中から、国の体制、宗教、生活慣習、そのような違いにもかかわらず、女性の地位にはどの国の、どの階級にも問題があること、しかし、多くの国ぐにでこれらの状況に変化がおこりつつあることが明らかになってきた。これは、国際婦人年以來、地球的規模でおし進められている女性解放の大きなうねりによるものであろう。今後これをさらにおし進めるためには、国という枠をこえて、情報を交換し、力を合わせてゆくほかはない。

しかし、きびしい指摘もあった。日本とアジアの国ぐにとの過去。あるいは現在においてすらも生じている摩擦。これらの国ぐにとのかかわりを論ずる時、これは避けて通れない問題である。それだけに、今、これらの国ぐにと、相互理解に根ざした信頼関係を築かなければ、それは、私共の子や孫の世代の重い負担になることだろう。

目を移すとまばゆいばかりの新緑の季節、若葉を風がさわやかに吹き抜けてゆく。風薫る、といわれるこの時期、Asian Breezeも、国から国へ、街から街へ、人から人へ、かぐわしい香りを運んで欲しいものだ。



いま、女性たちは——WOMEN TODAY——



東京家政大学教授・評論家

檀 口 恵 子

1988年、SIGIという世界的なフェミニストグループとフィリピンの女性下院議員の企画による汎太平洋地域の女性フォーラムがあり、日本からは私が招かれた。2週間に及ぶ長丁場の会議のおかげで、マニラだけでなく、バギオのような地方都市のセッションに参加することができ、バギオ近郊の多国籍企業である金鉱に働く少数民族やその主婦たちに取材することができた。一方で、フィリピンの大学や社会教育におけるハイ・レベルの女性学講座開設の実態を知ることができ、女性を通してこの国の人びとの壮大な格差を目のあたりにした。

私がフィリピンを訪ねたこの時期は、買春ツアーは多少下火になっていたものの、観光局の女性官僚が「日本からの観光客は圧倒的に男性の比率が高いので、日本の女性にももっと遊びに来てほしい」とシンポジウムで述べたのが印象に残っている。しかし、この時期、日本とフィリピンにかかわる女性問題として急速に浮かび上がってきたのは、風俗営業を中心とした出稼ぎ女性問題、そしてフィリピン花嫁の問題だった。フィリピン政府がメールオーダー・ブライドをはじめ、ビジネスとしての花嫁紹介を規制する法律を制定したのは昨年のことである。私の訪れた当時は過疎と嫁不足に悩む農村を中心に、ときには自治体が先立ちで、フィリピンへ集団見合いツアーが繰り出している時期だった。すでに農村にはフィリピンはじめアジアからの花嫁が目立ち、中には離婚や詐欺まがいの事件に発展する例さえあった。

フィリピンへ帰つ少し前、私はアジアからの花嫁を迎える自治体の長を含めた「村の国際結婚」についてのシンポジウムに参加した。その席で、自治体関係者から出た発言が私には気になった。一つは「日本女性が失った大和撫子のよさを彼女らは持っている」という意味の発言であり、もう一つは「とにかく村の中に溶け込ませる」ということばが連発されたことだった。

大和撫子ということばに郷愁を感じる世代がいることはわかるし、また「大和撫子」ということばが必ずしもマイナス・イメージだけだとは思わない。しかし、過去の家制度の中に生きた女性像と重ねてPRされた歴史を思うと、私は「大和撫子」の中に、運命にひたすら従順に耐えて働くという男性にとって都合のよいイメージがまず浮かんできてしまう。そして「溶け込む」ことばかり相手に求めるのは、国際化とは違うのではないか、アジアからの花嫁が日本に住む決意をした以上、日本語を覚え日本文化に馴じもうとつとめるのは当然のことだろう。それならば受け入れる日本側も、花嫁たち

の何分の1かでも努力して、タガログ語を覚え、フィリピン料理に興味を持ち、フィリピンの文化吸収につとめて当然ではないか——私はそんな意見を述べたのを記憶している。

東北のそうした村の一つで、フィリピンの映画祭があると知って、ちょうどマニラに発つ直前だったので私は出かけてみた。その企画自体はとてもよいことだと思ったが、会場へ行ってみて、当のフィリピン花嫁たちが1人も招待されていないのに驚いた。運転免許のない彼女らは、だれかに車に乗せてもらわなかったら会場にやって来られないのに。ようやく東京で顔見知りになった1人の夫が、自分のバンに2家族乗せてきたのでほっとしたけれど。

帰りに、偶然知った情報で、少し前まで空き家だった、という家を訪ねた。2年前フィリピンから来て、すでに長子を出産、今また妊娠中という女性がたった1人で、ブラウスにパッドをつける内職に励んでいた。子どもの姿はなかった。1か月ほど前、彼女は姑の腕に噛みつく、という派手な嫁姑の争いをやってのけ、双方激怒し、冷却期間の別居中だという。子どもを連れて出るのは許されず、舅姑の手元に残したが、幸い夫と一緒に出てくれ、今、夫婦2人でくらしているという。

嫁姑の争いの理由を、彼女はかなりしっかりした日本語に英語をまじえながら説明した。「Nさん(義妹)は、いつも子どもを連れてきて、その子どものウンチの世話まで私にさせる。自分の子どものことは自分がしたらいい。」「Nさんのお産のときお姑さんはつききりだった。私のお産のときはあとで見にきただけ。」「パートや内職の収入も、夫の収入も全部お舅さん、お姑さんに出して、少しだけお小づかいをもらうのも、ちょっとおかしいと思う。」「同居は承知で来た。でも、お舅さん、お姑さんがワン・ファミリー、私と夫と子どもがワン・ファミリー。二つのファミリーがいっしょにくらすつもりで来た。ところがお姑さんたちは、夫も私も、親を中心にしたワン・ファミリーだと思っている。おかしいと思いませんか。」「

私は彼女の堂どうたる正論に返すことがなかった。ある日、義妹の子と自分の子との差別待遇から口論になり、積もり積もった不満を表現するほど日本語に熟達しているわけではないから、姑の腕に噛みつく、という行為になった。姑側は「親に傷を負わせる恐しい嫁」というのでこちらもカンカンだという。

彼女の言い分はまことにご尤もだが、それは、これまで大和撫子たる日本の嫁たちが「仕方がないこと」として耐えてきたことばかりである。その結果の嫁不足であることを、日本の「村」「舅姑」側はどれだけ理解しているのだろうか。喧嘩の少し前、泥田に入って舅と共に田植する彼女の姿が地元テレビで紹介された。それほどに労をいとわぬ「模範的」花嫁だった。農作業のきびしさも、日本の寒さも食べものも、少しも苦にならない、愛する夫と子がいるから、と彼女は言った。我慢ならないのは「嫁」が一人前に扱われない日本の家制度であり習慣だった。この事情を、フィリピンのフォーラムで報告するのは、まるで日本の女性の怠慢を天下に公表するようで、私の気は重かった。

日本国際ボランティアセンター

日本国際ボランティアセンター（JVOC）は、今年の2月で、満11歳の誕生日を迎えた。約11年間の歩みのなかで、「緊急救援」から「復興協力」へ、そしてさらに「開発協力」、「地球環境問題への取り組み」と活動内容が広がってきた。活動地もアジアだけでなく、アフリカ、中近東にも及んでいる。

これらの活動にたずさわった若者は、いままで1000人をこえるが、現在常駐のスタッフは東京の本部と神奈川支部に17人、海外に25人、海外での現地人スタッフが35人いる。タイでは難民キャンプにおいて技術学校と日本語学校、バンコクのスラムにおいて図書館そしてタイ農村での奨学金と農村開発を行っている。カンボジアにおいては、母子保健、技術学校、井戸掘り、給水、ラオスでは生活改善普及員の養成、ベトナムでは帰還難民の職業訓練と総合復興、エチオピアでは緊急食糧援助を行っている。さらにタイにおいては環境を回復するための植林・農業を開始した。日本国内での活動として、定住難民の支援、国際理解のための活動、さらに東京本部に調査研究部門が今年から発足した。

一般的な会社が男性の人数が多いなかで、JVOCの日本そして海外のスタッフは女性が半数以上の人数を占めている。これは、アジアやアフリカの現場において、現地の生活の改善を考えた場合に、現地の母親が重要であるからにほかならない。このお母さんたちとともに、協力していける女性ボランティアの役割は重要である。カンボジアの農村やラオスの農村で、一軒一軒家を訪ねて話を聞いて、どこをどのように改善していくか、その地域の経済状態や組織に、いちばん最適な方法を考えていく。たとえば、きれいな飲み水を得るための井戸掘り、栄養を考えた家庭菜園、保健教育などである。

また、政府の援助機関にはない特徴として、日本国内において、社会人や学生、主婦たちがJVOC東京事務所に集まり、講演会や学習会を企画したり、チャリティイベントを企画して支援活動を行っていることがある。だれでもが参加できる国際協力活動こそが、本来の市民による協力活動であると信じている。地方での動きも最近さかんになり、九州、愛媛、山形、新潟で会員やJVOCのOBが講演会やチャリティイベントを行っている。これからの地方の動きに期待する。

JVOCについての詳しくは、(03)3834-2388

JVOC東京事務所 東村・柴田まで。（JVOC研究員 東村康文）



▲ラオスで働く日本人ボランティア



▲ラオスの井戸掘り(清潔な水を得るために井戸を掘るラオス人の母親)

海外通信員決定

フォーラム海外通信員が決定しました。通信員の皆さんには、今後1年間、アジア各国の“風”を届けてもらいます。(通信員レポートは随時掲載していきます。)



王 静さん
〈中国〉

上海にある繊維工場で、織物を染める仕事をしています。



Luwarsih Pringoadisurjoさん
〈インドネシア〉

女性と開発の問題に取り組み、現在は社会・文化センターの研究員です。



仲間 まち子さん
〈マレーシア〉

マレーシアの男性と結婚しました。4歳になる男の子の母親です。



Elena L. Samonteさん
〈フィリピン〉

フィリピン大学助教授(心理学)です。日本の心理学も研究しています。



山口 のり子さん
〈シンガポール〉

海外駐在員の妻です。日本語教師、電話相談員として活動中です。



加藤 真理子さん
〈タイ〉

現在タイのコンケン大学に留学中、開発社会学を学んでいます。

海外訪問——タイ・インドネシア——

アジア女性交流・研究フォーラムの設立あいさつを兼ねて情報の収集・交換のために、本年1月、高橋理事長をはじめ4人のフォーラム関係者がタイとインドネシアを訪問しました。

1. 日程

平成3年(1991年)1月16日(水)～1月23日(水)

2. 訪問者

高橋 久子(アジア女性交流・研究フォーラム理事長)

堀内 光子(内閣総理大臣官房参事官、アジア女性交流・研究フォーラム評議員)

篠崎 正美(アジア女性交流・研究フォーラム主席研究員)

神崎 智子(アジア女性交流・研究フォーラム主幹)

3. 訪問先

●タイ(バンコク)

- ILO(国際労働機関)
- ESCAP(アジア太平洋経済社会委員会)

■UNIFEM(国連婦人開発基金)

■UNDP(国連開発計画)

■タイ総理府婦人問題担当室

■タイ内務省労働局

■チュラロンコーン大学

(チェンマイ)

■ILOプロジェクト現場

■チェンマイYMCA

●インドネシア(ジャカルタ)

■インドネシア婦人の役割省

■インドネシア女性会議(KOWANI)

■インドネシア科学情報センター

■インドネシア家族福祉省家族福祉運動局(PKK)

■家族福祉運動局プロジェクト現場

■ブルーバードタクシー

THAILAND

タイでは、国連機関を訪ね、女性の地位向上についての国際的な取り組みについて情報収集を行ったほか、タイ総理府や内務省婦人問題担当室を訪問し、行政担当官からタイの女性の現状や行政施策について詳しい説明を受けました。

今回のタイ訪問の大きな目的の一つは、ILOが行っている農村における女性家内労働者支援プロジェクトの現地調査でした。

このプロジェクトは、東南アジア3か国(タイ・インドネシア・フィリピン)で、ILOが、1987年から3か年にわたって総額765,122 USドルの資金を援助し行っているものです。農村等で増加している家内労働者を組織化し、販売システムの確立や生産体制の充実を図ることで、労働条件の改善や副収入の増加を促し、生活レベルの向上を目指そうとするものです。

私たちは、タイ北西部の都市チェンマイを訪れました。ここでは、チェンマイYMCAのスタッフがプロジェクト推進のための現地指導にあっており、当日は3人の若手スタッフが、直営の売店を運営する村と機織機を共同利用する村の二つを案内してくれました。



▲機織りをする女性(Ban Pah Tung村)

●Ban Pah Tung村

Ban Pah Tungでは、1990年8月に寺院の敷地内に開設された売店を見学しました。この寺院には非常に高名な僧がいて、各地から多くの人びとが訪れます。売店は、これらの参拝者をターゲットにし、村の女性たちが作った綿織物や刺繍のブラウス、人形などを販売しています。売店の運営は女性たち自らがあがっていました。

生産は個人の家で行われ、その中には洋服用の木綿の織物を、北部の山岳民族が受け継いできた伝統的なデザインで織っている女性もいました。

●Ban Tan Nua村

Ban Tan Nuaは、チェンマイの東北約100kmに位置する小さな村で、私たちはBan Pah Tungから2時間余り車を走らせました。村に入ると、村を流れる川に水くみに行く女性や子供たちの姿が見られました。

Ban Tan Nuaは綿織物の村で、村には共同作業センターが建てられており、作業場には織機が6機収納されています。

村の女性たちは、都合の良い時にここに来て機織りをするそうで、当日も2人の女性が働いていました。伝統的な織柄のほか、新しい柄の開発も行われており、意欲的な取り組みが見られました。



▲作業場(Ban Tan Nua村)



▲婦人問題担当大臣(中央)と

INDONESIA

インドネシアの政治は、

- 1) 神への信仰
- 2) 国民全体への社会正義
- 3) インドネシアの統一
- 4) 代表による会議で指導される民主主義
- 5) 公正で文明的な人道主義

という5原則(パンチャ・シラ)を標榜しています。

14,000もの大小さまざまな島に、1億8千万人の人口が暮らすこの東南アジアの大国。これをまとめあげながら発展させることは容易ではないと思われませんが、この5原則の中にその為の必要不可欠な条件と願望がこめられているように思えます。

同時に国民の90%がイスラム教徒で、世界でも最もイスラム教徒の人口が多い国ですが、宗教を、社会的統合と社会開発の双方に土台としてうまく位置づける政策が工夫されてもいるようです。

この、統合と開発の政策を、国民一人ひとりに浸透させるのに大きな役割を果たしているのが、家族福祉推進(PKK)運動です。

各村や地区には、約10人単位のCadreという小集団が、20~100ぐらい組織されています。このCadreは日本占領時代(1942~1945年)に作られた「隣組」や「婦人会」が原型という説もあります。

CadreをPKKの基礎単位として、読み書きのできない女性への教育、地区の清掃美化活動、母子保健や家族計画の啓発普及、さらには経済的自立のための協同組合活動や収入形成活動等が活発に行われているとのことでした。

実際に、東ジャカルタ地区のPKKの現場に案内していただきました。区の公務員さんを支えてPKK運動の先頭を率いているのは、ボランティアであるその奥さんたちのパワーでした。集会所やモスク、作業所等で、この名誉職の女性ボランティアに率いられた地区の女性たちの、整然とした行動ぶりに目を見張りました。

絶対的貧困層がまだおよそ3000万人はいると言われるインドネシアで、女性が先頭に立っての官民一体のPKK活動のもつ役割は、大変大きいことを痛感させられました。



▲モスクにて(PKKプロジェクト推進地区)

フォーラムの窓 クロスロード

フォーラムが開設してもう7か月に近い。ここを直接訪問して下さった外国の方がたは、アジアを中心に30以上もの国からだと思う。国連や関係機関の職員、各国の女性問題担当行政官、大学の先生といった専門職・管理職だけでなく、草の根の女性運動のリーダーや主婦、研修生、舞踊家、留学生など、多彩である。フォーラムは文字通り異文化のクロスロードとして動き始めている。

韓国から九州国際大学に留学中の黄晶顯さんも、毎週フォーラムに通って下さる。と言っても、私たちのハングル語の先生としてである。オペラ歌手になりたかったと言う美しい声の持主、そして礼儀正しい青年である。

ハングル語の上達度のことは横に置く(?)として、彼からは、韓国の食べ物や住宅事情・映画の話から、このところの反政府学生運動や焼身自殺の続出といった深刻な問題まで、若い世代の意見として教わることが多い。逆に黄さんの方も、フォーラムの活動目的を徐々に理解するにつれ、変化が生まれている。韓国や日本の女性の状況について目が向くようになったこと、ソウルに帰省してもお母さんや親戚の女性たちを観察するようになり、女友達とも彼女たちの抱えている問題は何かなど議論するようになった、と話して下さる。

彼は、韓国文化を教えることを通じて、「女性という見えなくされた異文化」に気付き始めて下さったのである。

さて、その韓国へ、昨秋来、たて続けに訪問を重ねてきた。韓国女性開発院との、家族意識についての日韓比較の共同研究を始めるためである。

私共の研究ラインでは、向こう5年間のテーマとして「開発と女性」を掲げ、その仕事のひとつとして“開発が女性の地位・役割及び家族意識にどんな影響を及ぼしているか”について、アジア数か国での比較調査を行うことを計画した。韓国調査はその第一歩である。

今年度はソウルという首都圏での面接調査、次年度は農村部でのインテンシヴな聞き取り調査をすることで、前近代・近代・現代がおそらく同時に圧縮・融合されていると思われる実情に接近したい。幸い、開発院も大きな関心を寄せて下さっている。

日本ではこれまで、韓国の現代家族の研究は数少なく、中根千枝氏や小林由里子氏らのものを管見するだけである。性別役割の変化に主な焦点をあてた、日本及び韓国の現代家族の比較的規模の大きい調査研究となると、まだ皆無と言ってよい状態である。同じ儒教文化圏で、経済発展がアジアの他地域より急速な両国での、女性と家族の変化がどんな共通性と相違をもって進んでいるのかを探りたいと思っている。

ソウルの4月は空も木々の緑も漢江の水も、さわやかに美しい。高橋理事長がご一緒に下さり、念願通り、韓国女性開発院との間に、共同研究の契約書が署名された。

5月、ソウルは一転してデモと警官隊の衝突で荒れているが、2日後には、予備調査に合流する予定である。

アジア女性交流・研究フォーラム
主席研究員 篠崎 正美

INFORMATION

●第2回アジアセミナー

アジア女性交流・研究フォーラムでは、市民の皆さんにアジアのことについて、理解を深めていただくために、平成3年(1991年)8月10日から9月21日にかけて6回連続の公開セミナーを北九州国際会議場で開催します。

現在、女性の地位向上のために、「開発と女性」への積極的な取り組みが求められています。

この場合の「開発」は、政治、経済、社会、文化、その他の総合的な開発から人間のあらゆる面の成長まで幅広い開発を意味すると考えられています。

今回は、「開発と女性」の問題について理解や認識を深めていくことを目的とします。

このセミナーを通して、アジアの国ぐにの女性がおかれている状況や、開発を進める担い手としての女性の存在を認識することによって、アジアの国ぐにの開発に果たす女性の役割を考え、また、同時にこれからの私たちの役割についても考えていきたいと思っています。

皆さん、ふるって、ご参加ください。

詳しいお問い合わせは、フォーラム (093)551-1220まで。

●第2回アジア女性会議—北九州

第2回アジア女性会議—北九州の日程が決定しました。平成3年(1991年)12月1日(日)～2日(月)の2日間の開催です。

第2回会議では、政策決定における女性の参加促進を取り上げ、さまざまな考察を行います。

●“Asian Breeze”定期購読受付中

“Asian Breeze”は、北九州市広聴課、各区市民相談室などで無料で配布しています。また、ご希望の方には、直接郵送による定期購読を受け付けますが、この場合は送料をご負担いただきます。

お申し込みは、フォーラム (093)551-1220まで。

●UNIFEM アシヨ女史講演会

UNIFEM(国連婦人開発基金)は、世界の開発途上国の困窮する女性たちの開発への自助努力を支援する機関です。

平成3年(1991年)3月、UNIFEM初の親善大使フィービー・ムガ・アシヨさんが女性活動の発展を奨励するため来日。フォーラムではアシヨさんを招き、講演会を開きました。アシヨさんは、ケニアの独立のために活動し、教師、ソーシャルワーカー、女性刑務所長、国連総会代表などを歴任、現在は、国連アフリカ経済委員会の顧問を務めています。UNIFEMは、単に金銭的な援助を行うのではなく、開発のプロジェクトに企画から実施まで現地の女性が参加できるための努力をしています。アシヨさんも開発途上国における女性の厳しい現状を訴え、開発における女性の役割の重要性を強調するとともに、男女を含めた人間の視点からの開発と、それを支援する草の根レベルでの協力の必要性を呼びかけました。

編集後記

自分自身の問題を抜きにして、女性問題は考えられません。また、現状を知らずして、アジアの問題は語れません。

今回特集したアジア女性会議には、関心を持たれた大勢の方に参加していただきました。自分の内側にも「風」を起こしていきたいと思っています。

(K)



アジア女性交流・研究フォーラム

〒802 北九州市小倉北区浅野3丁目9-30 北九州国際会議場8F
PHONE(093)551-1220 FAX(093)551-7535